

患難をも喜ぶ

松山義則

ご卒業をおよろこび申し上げます。小学生のころから長い勉学の期間をすごされ、いま学生時代を終えて社会人として出発される大きな人生の転機をむかえられました。うれしさどさわやかさ、そしてきびしさのただよう思いのなかにおすごしと思います。ときまさしに早春の季節、暖かさのなかにも冷たさを感じるころであります。「母の胸にありしときより、わが行く道、さきわいたもう」と讚美歌の一節にあります。母の胸にいだかれていた幼少のころから人びとの生涯は神の祝福をうけ、それぞれの歩む道程が与えられてきました。いま、大学卒業という人生の一里塚に立つて、つぎに見える山道に向かって歩み出そうとしておられます。

現代の青年をあらわす新人類や超新人類などという言葉聞いてから久しくなります。その言おうとするとところの一つは、老人や熟年の人たちから見ると、現代の若者の気持が理解できかねるということであり、住んでいる世界の異なる人びとのように思えるという

ことでありましょう。たしかに、時代や文化そして教育のあり方によって人びとの感じ方や考え方は影響を受け変化し、その時代精神に生きる特性を身につけるものであります。しかし、新人類という表現には、勝手きままで無責任、心より物、金、自分のことだけを考えている人たちといった批判的なニュアンスをもっているようです。新人類は、努力や忍耐、根性などはうけつけない、会社よりは自分を中心にし、体だけでなっとくする人たちであるなどと言われています。しかし、人間であるかぎり、誰しもできれば忍耐や苦勞はしたくないし、自分を大事にして体験したことを大切にしたいと思うであります。老人たちが、仕事とか集団意識、あるいは理想に生きてきたのに、いまの青年は、遊びや個人意識、あるいはあまりに現実的だと批判し、そして新人類と名づけることによって、ものごとの特長を類型化し抽象化することは人びとにアピールし、なるほどと思わせる効果を果すであります。しかし、わたくしが接している若い学生諸君のなかから、このような新人類という言葉にびつたりの人を見出すことは困難です。たしかにそれぞれ个性的であり、また非日常的な世界を求めながら、常識性も十分に身につけた方たちだと考えています。

美感遊創という言葉があります。いろいろと解釈できると思いますが、美しい価値を求め、感性をたかめ、遊びに生きそして創造性をもつということでありましょう。わるい表現をとれば、かっこよく、単にフィリングだけで、遊びまわり、自分の勝手な考えだけで生活することにもなりましょう。新人類ときめつけるときにはこのような内容がふくまれているのかもしれない。しかしこの美感遊創という言葉にはまことに深い意味がある

と思います。人間存在にとって真善という価値と並んで、美を求める意義は深いものがあります。音楽、絵画、彫刻などは人間のもつ美への自然な活動であり、自然や人間の世界に美が見出されます。人生において美をもつ美に生きることの大切さは言うまでもありません。美にはあるいは豪華なものもありましょうが質朴さにもゆたかな美しさがあります。感性は、ものを思い考える心のはたらきや記憶するはたらきとちがって、生き生きとした感受性を意味するでしょう。すべての心のはたらきはこの繊細な感性から発するといつてよいと思います。遊びは仕事に対立するものでしょうが、遊びと仕事をわけることはその人の生き方により、また社会がうみ出した約束であるかもしれせん。生きることとはすべて遊びであると言った先人もありました。子供の活動はすべて遊びであり、本来、人生を自発的な遊びとして生きることが人間にとっての理想でありましょう。創はつくり出すこと、創造、創作であります。人生とは活動であり、生きているとは身体と精神の活性化そのものであります。自己を表現することなしに活性化はありません。ものまねさえ、自己を媒介にした活動であり、独創的なオリジナルの創造活動はわたくしち人間が生涯にわたって行うたい活動であります。

美感遊創という言葉のなかに、人間の個性にあふれたあり方をみることができると思われます。人間が生きているかぎり、自然のなかで歴史の流れのなかで、個性的に生きる外ありません。それは美に向かって、感性にあふれ、遊びのゆたかさに生き、自己の表現に生涯をすごすことであります。新島襄先生は真正の自由を求める個性的な青年を大切にしようとして願いました。「同志社においては個儼不羈なる書生を圧束せず、つとめてその本性に

従い、これを順導しもって天下の人物を養成すべきこと」と語りました。人間は自分を大切にし、自分の生命を生きる以外にありません。

最近、わたくしは一人の卒業生から手紙を受け取りました。入院生活をくりかえし療養生活をしている近況について書いていました。そして、「ときどき暴れたす病氣とわたしはつきあっていかねばなりません」と結んでありました。いそいで自宅に見舞いました。が、彼女は入院中病床にたまたまおかれていたカルテを読んで、自分の身体のあちこちに癌が転移していることを知りました。病院に通院するとき、タクシーがゆれると背骨がとも激しく痛むので特製のコルセットを首からはめて乗るのですと笑って話ながらそれを見せてくれました。激しい痛みを耐え、ときどき暴れ出す病氣とつきあって気落ちすることなく、希望のなかに明るく生きていくひとりのひとに、わたくしは言葉につくせない強い感動をおぼえました。

麻酔のいまにも深まっていくこうとする直前、手術台に乗せられた子どもが予想される痛みとあまりの恐怖に、顔の上に、心配して見つめている父の衿からたれ下がっているネクタイにしがみついて泣きさげんでいる姿がありました。わたくしたち誰もが、子どものころの痛みを思い出します。痛みのないひとはありません。人生は痛み、苦痛の連続といってもいいでしょう。そしてひとはそれにじっと耐えていかねばなりません。また、互いにその痛みを知りわかちあわねばならないでしょう。競争社会では、他人には痛みを、自分には快楽を願う野卑な欲望だけがみちています。

このような社会、国と国と、集団と集団、派閥と派閥、人と人との間にあって酷しいた

たかいにときをすごすだけなのでしょうか。しかし、最後の日を思いながらも痛みに耐え、明るくときどき暴れ出す病気とつきあうたたかいのひとがありました。このことはわれわれにも来る現実だと思えます。「われわれは患難に会うように定められている」のです。しかし、われわれは、「患難をも喜ぶ」ようになりたいと思えます。われわれが個人的に感性にめざめて生きるかぎり、孤独であり弱さにみちていることを知ります。恐怖にあふれた子どもが顔の上から心配そうにのぞき込んでいる父のネクタイをにぎりしめたように、わたくしたちも永遠なる力によりたのみ、耐えてわが行くべき道を歩みつづけたと思います。卒業生諸君おひとりおひとりのご多幸を祈ります。

(同志社総長)

良心・強さ・チャレンジ

原 正

同志社大学を卒業される皆さんに心からお祝いを申しあげます。皆さんが本学に入学されてから本日の卒業式を迎えるまでには、いろいろなご苦労があったことでありましょう。しかし皆さんは、自らの努力によって困難をみごとに克服され、卒業の栄冠をかちとられました。本学での学生生活を顧みるとき、経済的にも精神的にも、また勉強のうえでも多かれ少なかれご父母をはじめ、ご家族、友人、先輩、教職員などのお世話になったことを謙虚に認めなければならぬと思います。特にお世話になったかたがたには、是非とも卒業の喜びを報告し、挨拶をしていただきたい。これは、皆さんが社会人として巣立っていくための大切なけじめであり、まさに第一関門といえましょう。

皆さんは、いま同志社大学を卒業して社会人としての第一歩を踏み出そうとしておりますが、今後皆さんが健全な社会人として大きく育つためにも、また人生をより良く生きるためにも、本学で学んだものを改めて確かめてみる必要があるのではないのでしょうか。

同志社の創立者新島襄先生は、一八七五(明治八)年、日本を救う道は教育の事業をおいてほかにないと考え、一國の良心ともいべき人民を養成する目的をもって官許同志社英学校を始められました。そして神を信じ真理を愛し人を尊敬するキリスト教主義を徳育の基本とする教育を行うことによって、自主、自立、自由の精神に富み、良心を手腕に運用

する力強い人物の育成を期待されました。新島先生の理想ともいうべきこの願いは、「良心碑」として正門を入ったところに、「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ランコトヲ」と象徴的に刻まれております。

新島先生の願いを実現されるのは、卒業していかれる皆さんをおいてほかにありません。皆さんは、自分ではわからないかもしれないかもしれませんが、いつのまにか同志社カラーが、そして同志社精神が身につけておられることと思えます。どうか良心を手腕に運用する力強い同志社人として人生を歩んでいただきたい。良心を失いかけた今の社会が、そして世界が皆さんを待ち望んでいるのです。

ところで「良心を手腕に運用する」とは、「自己の良心に従い忠実に行動する」ことを意味しますが、これを現実の社会で実行していくのは並大抵のことではありません。そこには、人間としての誠実さや努力というようなものは、もちろん不可欠ではありますが、なによりも強靱な意志が必要です。これを端的にいえば、強い人間でありましょう。新島先生は、信仰の人でありましたから当然かもしれないませんが、本当に意志の強い方でありました。それは、先生の次の和歌からも容易に伺い知ることができます。

いしかねも透れかして一筋に

射る矢にこむる大丈夫の意地

皆さんがこれから入って行かれる現実の社会は決して生易しいものではありません。ときには、存亡のかかった苛酷なまでの競争をしいられ、あるいはがんじがらめの管理社会のわくの中でじっと耐えることもありましょう。たとえそのような厳しい状況下にあっても、良心を手腕に強く生きていただきたい。そしてできることなら、人間に本来あるべき心の豊かさやゆとりを忘れないでほしい。

本学を巣立たれる皆さんに、もう一つお願いがあります。それは、チャレンジ精神をも

って進んでほしいことです。新島先生は、二十一歳の一八六四年、欧米の文物に憧れ、命がけて函館を脱出され、水夫となって一年間、ようやくボストン港に着きました。アメリカで十年余に及ぶ勉強の後、帰国し、苦勞の末、同志社英学校を始められました。そのときの先生は新島先生とデイヴィス先生の二人で、生徒はわずか八人でありました。百十三年後の今日、大学だけでも約二十万人を数えるに至りました。まさに一粒の麦が地に落ちて大きな実を結んだといえましょう。

わが国は、現在「科学技術の目覚ましい発展を成し遂げ、経済が最も順調に推移している国」と世界から賞賛される一方で、欧米との経済摩擦にも悩まされております。これまでの成果をさらに発展させ、世界を納得させるに足る新しい価値を生み出すためには、さらに大きな努力が必要ですが、その努力の核となるものはオリジナリティーをおいてほかにないと思われれます。そのためには、ブレイク・スルー（突破）の精神が不可欠であります。極低温で一部の金属や化合物などの電気抵抗がなくなるのが超伝導現象ですが、ペドノルツとミュラーの両博士は、より高い温度で超伝導現象を起こす化合物を発見し、一九八七年のノーベル物理学賞に輝きました。彼等は、金属ではなくむしろ電気を通しにくいある種の酸化物に目をつけ、成功しました。常識などにとらわれず、ひたすら本質を追い求める「ブレイク・スルー」の精神が、不可能を可能に変えたのです。超伝導の実用化は、エネルギーや輸送、医療などさまざまな分野で、人類に多大な恩恵をもたらすものと、いま大きな期待が寄せられています。これは自然科学の一例にすぎませんが、皆さんの進まれる前途には為すべき仕事が無限にあると言っても過言ではないでしょう。どうか良心と不撓不屈の精神とチャレンジ精神をもって逞しく進んでいただきたい。

最後に卒業生一人ひとりの上に豊かな神の恵みがありますよう、祈ります。

（同志社大学長）

良心の人を目指して

石田 章

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。同志社女子大学での四年あるいは二年間の学業を終え、これから社会に巣立っていかれるみなさんに、その前途に幸多かれと祈り、心から祝福を送りたいと思います。同志社女子大学はあなた方のふる里です。これからも、何時でも、あなた方のふる里である同志社女子大学を訪ねて帰ってきてください。私たちも、それを待っていますから。

この文章をしたためながら、でもやはり私は、あの昨年の悲しい出来事にふれずにはおれません。昨年の成人の日、志半ばで悲劇的な死を遂げた短期大学部英米語科の尾崎弘恵さんのことです。あの事件がなければ、弘恵さんもこの三月、みなさんと一緒にうれしい卒業の日を迎えていたはずです。残念でなりません。どうかみなさんは、弘恵さんの死を無駄にすることなく、これからの人生で、何ものにも替ええぬ生命の重さを、大切に思っ

て生きていていただきたい。生命を大切にする素朴な思想をぬぎにして、いかなる世界

の平和も、人類の未来も在りえないはずだからです。

私は、あなた方のこれからの人生が、この上なく明るく輝かしい光に包まれつづけることを願っています。けれども、実際には、あなた方のこれからの道が、そのように恵まれた光に充ちた時ばかりでは決してないだろうとも思います。明るく楽しい日々であるどころか、現実には全くその逆であって、つらく暗い影におおわれた日々の方がはるかに多いだろうと思います。嫌になり、何もかも投げ出してしまいたい、そんな思いに駆られる日々の連続であるかも知れません。だが、そんな時、ふと考えてみてください。影は、光があるからこそ出来るのです。光があれば、必ずそこに影が生じます。しかも、光が強くとくれば明るいほど、その影はより暗く濃くなるのです。逆に言えば、濃く暗い影は、強く明るい光があればこそ出来る理屈です。これからのあなた方の前途が、明るい光に包まれた素晴らしい人生であることを願います。が、たとえ暗い影におおわれた日々に出会ったとしても、決してめげることなく、希望を持って生きて行っていただきたいのです。影があれば、そのすぐ傍らに、必ず明るい光が待っているのだ、と覚えていてください。神は決して、人間が耐ええないほどの苦難をお与えになることはないはずです。

光ある時、おごらず

影ある時、くじけず

新たな世紀二十一世紀は、もうほとんど目の前に来ています。あなた方は、その人生の

大半を二十一世紀に生きる人たちです。あなた方が、人間として最も円熟した年代に入る頃、時代は、二十一世紀という新たな世紀に入っていくのです。二十一世紀がどのような時代になるのか、私には想像もつきません。次の世紀の一〇〇年は、おそらく、今までに人類が経験したなん世紀分もの、重い比重の一〇〇年になるのではないのでしょうか。けれども、どんな世の中になっても、変らないものが一つだけあるように私には思えます。人間そのものです。人間の本質は、何時の時代にあっても、何ひとつ変らなかつたのではないか。私にはそう思えて仕方がないのです。ギリシャ悲劇が、シェイクスピアが、そしてまたチェホフが、そのことを示しているからです。

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に抛らざる可からず、是等の人民ハ一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人ハ即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す

これは、明治二十一年十一月、新島襄が公にした「同志社大学設立の旨意」の中に述べられている彼の有名な言葉です。新島が、同志社教育に託した理想は、途方もなく高遠なものであったと私には思えます。

一国の維持は、一握りの英雄的リーダーにまかせるべきではなく、広く人民の力に依るべきであり、しかもその人民は、ただの愚衆であつてはさらにならぬ。知識と教養にあふれ、しかも人格これすぐれた一国の良心ともいふべき人々であつて、同志社はそのよう

な人材をこそ育成する場なのだ、と。

人間は、本来が、愚かしく、弱く、怠惰で、ずるく、どうしようもない存在であるように私には思えます。古今のすぐれた文学はまた、おおむね人間を、そう描いているからです。新島は、そのような人間に、敢て一つの夢を、理想を託したのです。新島はまた、同志社教育の完成を、二百年の将来に置きました。新島のいう、一国の良心ともいべき人材が、一人また一人と、砂漠をうるおす水源の水のように、この世にしみ渡り、広がっていく遠い未来を夢みていたのでしょう。私には、それは、気の遠くなるような遠大な理想に思えます。だが、いろいろな意味を込めて、人類が重大な岐路に立たされているいま、そして、その危機はさらに一層深まる危険をはらんでいる来るべき二十一世紀においてこそ、新島の夢見たように「良心の全身に充満した」人材の世に満ちることが強く求められているのです。

あなた方の一人一人が、そのような良心の人であることを、心から願っています。

(同志社女子大学長)